

ヘリーショート賞

# 丘の上の君

赤野菜

右足を前に出す。左足を前に出す。右手は強く握り、左手も強く握る。鼻から吸う、口から吐く。丘はどこまでも続いている、私の足は止まらない。

「待って待って待って待って！」

口に出す言葉は無意味で、それでも言葉は出てしまう。私の目的には言葉は無意味なのだ。なぜなら、待たなければいけないそれは言葉を知らない。

「岡野君……何買うの？」

彼は、眼鏡のレンズに夕日のオレンジを反射させて私を見た。丘の上の自動販売機。街を見下ろすそれが、なぜここにあるのかは分からない。ここで買ったジュースの利益がどこに行くのかも。

それでも放課後、丘を上りきって荒くなった息を整えるため

に誰かが買っていく。そこに、彼はいた。

マフラーを鼻まで上げた完全防備な彼を、私はドキドキしながら見つめ返す。返事を待っているつもりだったけど、岡野君はまるで私のことなんていなかったように、ふいと目をそらした。

無視された。無視された！

自動販売機に向き直った彼に、悔しいような、悲しいような気持ちを含めた視線を向ける。いつもそうだ。数式にしか興味のない岡野君は、話しかけても答えを返してくれることはない。眼鏡の奥の目が、ちよつとこちらを見るだけ。

だから、初めて人間のように自動販売機の前で飲み物を選ぶ今の彼なら、返事を返してくれると思ったのに。

「……」

悲しくてうつむくと「ちゃりん」と音がした。夕日にきらりと光る100円玉。

「あっ」

はじめて、岡野君の慌てた声を聞いた。思わず漏れてしまった、というその声に感激する前に、私は走り出していた。

丘を転がり落ちる、岡野君の100円玉。

右足を前に出す。左足を前に出す。受験期になまってしまった元陸上部の足は、それでもまるで息を吸うように自然に動き出した。

優しい平らなグラウンドではない。アスファルトは固くて、ローファーじゃ走りにくい。それでも、その100円玉を私は、その手に捕まえたかった。

捕まえられたら、どうしようか。ちょっと笑って渡したら、岡野君は「ありがとう」ぐらいは言ってくれるのかな。

右足を前に出す。左足を前に出す。右手は強く握り、左手も強く握る。鼻から吸う、口から吐く。丘はどこまでも続いていて、私の足は止まらない。

「待って待って待って待って！」

口に出す言葉は無意味で、それでも言葉は出てしまう。私の目的には言葉は無意味なのだ。なぜなら、待たなければいけないそれは言葉を知らない。

重力がかかって、足はもつれるように進んでいく。つい出してしまった言葉のせいで、息が乱れた。久々に味わう、ペースの乱れた足。

じくじくと横腹が痛くなってきた。まるで初心者ようだ。

おなかが痛くて、痛くて、涙が出てきた。

話しかけても何も返してくれない、彼のためだ。おはようの挨拶が帰ってこなかった、朝を思い出す。意見を求めても何も返してくれなかった、道徳の時間。

胸が痛くて、痛くて、涙が出てきた。

右足を前に出す。左足を前に出す。右手は強く握り、左手も強く握る。鼻から吸う、口から吐く。丘はどこまでも続いていて、私の足は止まらない。

転がっていった100円玉は、丘の終わりと同時に息絶えた。痛む右腹を押さえて、身を屈めるとぼたりと涙が落ちた。親の敵のように100円玉を握りしめて、目を拭ってから振り返ると、目を丸くした岡野君が立っていた。

「どうしたの」

驚いたのは私だった。私、足は県内でも優秀な方だったんだよ。

「……横腹が痛くて」

驚いたまま、でも、私は嘘をついた。本当に、痛かったのは。

「脾臓が急激に収縮したんだ。血液の酸素を急激に送り出すか

ら

ぼつりと、彼は言った。原因なんて知っている。どうして痛いのかなんて、私が一番知っている。

原因が分かっても、この痛みが消えることなんてないのだ。

「ありがとう」

彼もちょっと汗ばんでいた。

固く握りしめていた右手が100円玉を離すと、手袋に包まれた彼の手がそれを受け取る。

冷えた私の手に、あたたかな缶が乗せられた。

「ココア」

横腹はまたちょっと痛い。

ベリーショート賞『丘の上の君』